
イヴリアル

琴乃 ゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イヴリアル

【Nコード】

N7582P

【作者名】

琴乃 ゆり

【あらすじ】

ある日正体不明の魔物に襲われ仲間を失ったイヴ、傷心のすえフラフラ街中を歩いているときに出会った正体不明の男。それは戦いの始まりに過ぎなかった。

第1話

地に月の光すら届かないほど鬱蒼とした森の中。
やけに不釣り合いな男女が大きな塊を挟んで向かい合って座っていた。

「随分手間取っちまったな」

まさに筋骨隆々といった表現がぴったりな中年のその男は、身の丈ほどの剣の刀身を磨きながら誰ともなく言った。

それに対して目の前に座る女は大して興味が無いのかそれに対して言葉を返さない。

ジツと仕留めた獲物を眺めていた。

こちらの女は、女というより少女と言ったほうが適切であろう顔立ちをしており、筋肉が意思を持ったかのような目の前の男と比べるとまるで小枝だ。

「おまけにこんな深くまで入っちまって、久しぶりに野宿になっちまっ」

「ザックがあそこであんなへましなければ、こんなことにはならなかったんだ……。風呂に入りたい」

男の言葉を遮って口を開いた少女の声音は、明らかに男を非難していた。

ザックは多少済まなそうな顔をして見せるも、反省の色はほとんどない。

「本当なら今頃ナタリーさんの作った温かいご飯を食べて、風呂に入って今日の疲れをとってるはずだったのに」

ナタリーはギルド経営の酒場の女将で、ザックの奥さんだ。
ザックと結婚する前は凄腕の魔道ハンターだったらしく、襲ってくる敵をバツバタと倒していたらしい。

現在にはなかなかの恰幅よい婦人で、ザックはこの人に頭が上がりない。

またこの人の作るご飯は大変美味しく、イヴはこの人の作る手料理が大好きだ。

「ああはいはい悪かったって、そう怒るなイヴ。帰ったら飯奢ってやるから」

「絶対だぞ!!」

イヴは念を押すようにザックに確認すると、やれやれとザックは首を振った。

満足したイヴは目の前に転がる獲物の死体観察に再び戻る。

死体の何がそんなに面白いのかイヴとは何度も仕事を共にしているが、そればかりは理解出来ない。

しばらく沈黙が続き、夜もいよいよ本格的に闇に包まれた頃

「俺はちよつと辺りを見てくるから、お前はここにいろよ」

いまいち眠れないザックが小声で言つと、いつの間にか横になっていたイヴが片手を上げた。

眠れないのはお互い様らしい。

どうも胸騒ぎがして眠れない。

さつきから離したくても、本能が何かを察しているのか手が己の得物から離れてくれないのだ。

嫌な予感というのは良く当たると言つが、今回ばかりは外れて欲しい。

起きあがらないイヴを残してザックは森の奥に入ってしまった。
ザックがいなくなってから数分、イヴは静かに腰のナイフに手をかけた。

『……囲まれてる。数は…そんなに多くない。』

この距離まで近づかれないと気付かないとは、不覚をとった。
ゆっくりと、だが確実に近づいてくる何か。

そのうちの一つが大きく跳躍し、一気にイヴとの距離を詰めると襲いかかってきた。

間一髪でそれを避けると、先程仕留めた獲物の上に飛び降りた。

『何だ、こいつらは』

どれも見たことが無い魔物ばかりだった、どれも形にまとまりがなくとても同一種族とは思えない。

通常魔物は魔族に従えられていない限り、多種族で徒党を組んだりしない。

つまりこの場合どこかに魔族がいるということなのだろうが、こんな人間の国の森に魔族がくるなど有り得ない。

それこそ戦争になりかねない事例だ。

だが、実際魔物達は多種族で存在していた。

『そういえばザックはどうした？』

イヴが一瞬意識を魔物から離れた瞬間、一匹が襲いかかってきた。
それを見ないで切り捨てると、大きく跳躍して魔物達を飛び越えザックが消えたほうに走り出す。

「ザアアアックー!!」

大声でザックの名を呼ぶと、どこからか何かを切る鈍い音が聞こえてきた。

そちらに向かつて走ると、少し開けた場所に出た。

その中心で中型の魔物数体に囲まれたザックがいた。

中型といってもザックの2倍から3倍の大きさはある。

ザックはすでに相当傷ついているらしく片膝を地についていた。

「ザック、今加勢する!!」

「いらん!!それよりもお前はそのまま街に戻ってこの事を伝えろ!!」

「そんなことをしたらザックは」

どうみても勝てる相手ではない。

結果は目に見えている。

「アンタが死んだらアタシは……、アタシはナタリーさんに何て顔して会ったらいんだ!!」

「馬鹿野郎!!それで今ここで二人でおっ死んじまうよりかはいいだろ。この魔物の状況は明らかに異質だ、誰かに伝えなきゃならねえ。それはお前がやれ!!いいな、返事は?」

「……………」

「返事は!?!」

「……………絶対、絶対助けに戻るからな。」

イヴは振り返らずに走り出した。

「ああそれでいい。お前はこんなところで死ぬには勿体無さ過ぎる」

ザックは再び剣を構え、目の前の魔物を見据えた。

『ザックの馬鹿!!』

イヴは我武者羅に森の中を走っていた。

闇夜で視界が悪く何度もつまずき転びそうになりながらも走り続けた。

途中何匹かの魔物に襲われたが、それらは全て一蹴した。

全力で走り続けること1時間、体力の限界はとうに超えていたが森を出ることが出来た。

まだ当たりは薄暗かったが、ギルドで朝の早い者なら既に何人が起きていただろう。

イヴは己の体に鞭打ってギルドの酒場に走った。

「ザックが!!」

雪崩れるようにして入ってきたイヴに酒場にいた数名が驚いて声をあげた。

イヴはそのまま倒れ込むが、何とか手をついて堪える。

「……………ザックが……………森で……………ハアハア……………に」

息も絶え絶えにイヴがさういうと、何人かがイヴを助け起こしてイスに座らせ水を差しだした。

「イヴ落ち着け、ザックが森でどうしたんだ」

「ザックが森で魔物に襲われてる、助けてくれ!!」

目の前にいた一人の胸倉掴んで訴えると、肩を掴まれ再びイスに座らされた。

「分かったから落ち着け、すぐに人を集めて向うから、お前は少し休め」

仲間に宥められてイヴは少し落ち着き呼吸を整えると

「朝からうるさいねえ、何事だい？」

階段上からナタリーがこちらを見下ろしていた。

それを見たイヴは仲間が止めるのも間に合わず、ナタリーに駆け寄った。

「ナタリーさん、ザックが、ザックが森で魔物に！！それで、アタシ……」

涙が溢れてきた、それ以上は言葉が続かない。

そんなイヴをナタリーは優しく抱き締めると囁いた。

「そんなに泣かなくても大丈夫、うちの旦那は魔物にやられるほど弱くない。アンタだって知ってるでしょ？」

ナタリーがイヴの目尻の涙を拭くと、そこには女戦士の顔があった。

「アンタ達、3分以内に皆を起こして準備を整えな。すぐにザックを助けに行くよー!!」

それからキビキビと的確に指示を飛ばすナタリーさんの言うとおり、3分後にはギルドの先鋭達が眠い目を擦りながらもしっかい準備を整え終えていた。

「イヴ、疲れてるところ悪いけど案内してくれるね？」

「うん」

十数人という大所帯で森に入ると、早速どこからともなく魔物が数体襲ってきたが、あつという間に蹴散らされた。

それから少々距離を置いて、二つに分かれ進んで行く。

そして完全に日が昇り切った頃のことだった。

「よくやったよ、あんたは……。」

イヴの目の前にザックの変わり果てた姿があった。

無残に魔物に食い散らかされ、近くに落ちていた剣からやつとザックと判断出来る。

周囲には魔物が数体転がっている。

どれもいくつも切り傷や刺し傷があった。

イヴはその場に崩れると泣き喚いた。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

ナタリーはきつくイヴを抱きしめた、歯を食いしばった。

「おいつ、ここをしてみる……!」

ギルドの一人が地を指して仲間を呼んだ。

それは紛れも無く魔物が地を這った跡で、それは血痕と共に森の奥に続いていた。

「……生き残りがいるか。どうするアンタ達。このまま帰るかい？」

誰ひとりとして首を縦に振らない。

イヴは涙を拭くと、跡にそって歩き出した。

皆も無言でそれに続く。

「ザツクの仇はアタシがとります。」

「それじゃあ、アタシとどっちが早いか競争だねえ。恨みつこなしだよ?」

ナタリーがいつになく重く言った。

奥に進むと、少し狭まった場所に何か黒いものが丸くなっているのが見えた。

それがこちらの気配に気付いたらしく体を起こすと、威嚇し吠えた。ナタリーが素早く詠唱に入るのを隣で聞くと、イヴはナイフを両手に構えた。

イヴが駆けだすのと同時に火球が横を飛んでいく。

どう考えても人間より早いそれは、先に魔物に届くが大きく振り上げた腕がそれを薙ぎ払ってしまった。

ナタリーが舌打ちするが、イヴには好機だった。

薙ぎ払った勢いを止め切れていない魔物の脳天にナイフを一本突き立てると、続いて2本目も突き立て、同時に1本目を抜くと、そのまま首にねじ込んだ。

魔物が声もあげられるそのまま崩れ落ちる。

「恐ろしい子だよ、アンタは」

それを見ていたナタリーは呟くが、全身に返り血を浴びたイヴには聞こえない。

ただ魔物を冷たい目で見降ろしていた。

第1話（後書き）

ザックさん……………初登場第1話で何て不憫な……………。

第2話

ギルドの酒場が存在する王都の大通りは昨晚のことが嘘であるかの
そうに賑わっていた。

イヴはその中を亡霊のようにただ歩いていた。
目的は無い。

じっとしていると昨日のことが思い出されて落ち着かないのだ。
だから当ても無く街に出てみたのだが、あまり気が紛れることはな
かった。

みんなこんな状態のイヴに興味も示さなかったし、イヴも興味が沸
かなかった。

いつもなら足を止める大道芸も、今のイヴにはその辺の石ころとな
んら変わらない。

途中何人かとぶつかったが、人の多い大通りではそんなことは日常
茶飯事。

誰も気にしなかった。

「お姉さん、そんな辛気臭い顔してどこ行くんのだ？」

突然背後から男に声をかけられた。

声からして若い男だということは分かるが、同時にチャラそうでも
ある。

大抵こういう輩に関わると碌な事が無い。

無視を決め込んで歩みを速めたが男は諦めなかった。

どこからきたとか何してるんだとか色々と質問攻めにされイライラ
してきたイヴは振り向き様に、男の鳩尾に一発決め込むとパツと走
り出した。

男が何か呟いていたが気にしちやいられない。

人々を押し分け脇道に入り迷路のような路地裏を進んでいくと、大

通りからは考えられないほど寂れた場所に出た。

イヴはしまったと思う。

ダウントウン。

王都の西に位置する警備の行き届かない無法地帯。

その日暮らしの者が多く、犯罪が絶えないその場所は大通りの人間は滅多に近寄らない。

それはギルドの人間も例外ではなく、例えかなりの実力者であってもよっぽどの事情が無い限り単独でやってくることはなかった。

ダウントウンには何が潜んでいるか分からない。

それはピンからキリまでだ。

だからすぐに踵を返そうとしたが、何かにぶつかりそれは叶わなかった。

視線をあげると汚い男が数人イヴの背後に立っていた。

男は皆何日も風呂に入っていないような異様な臭いを発し、服はボロボロだったが手には欠けてはいるものの鈍い光を放つ剣が握られていた。

「今日についてるな、とんだ上玉だ」

中央の男が口を開いた。

そいつは男たちの中でも一際大きく、手にした得物もそれに見合った大きさだった。

「ここは危ないからよお、一人でいると襲われちゃうぞ」

「おじさん達は親切だからね、助けてあげようか」

そんなことを言って下品に笑い、中央の男がイヴに手を伸ばしてきた。

だが……

「いつてえ！！……何しやがるクソガキ！！」

男は腕に走った激痛にイヴから手を引いた、右手を押さえる左手の隙間から赤い液体がしたたっている。

イヴは隠しナイフについた血を丁寧に拭き取ると、もう一本ナイフを取り出した。

「私に汚い手で触るな」

ナイフを構え戦闘の態勢をとったイヴに男達は一瞬怯んだが、本当に一瞬だけだった。

「何だお譲ちゃんが俺たちに戦いの手ほどきをしてくれるのか？それはお笑いだな」

言うが早い男たちが一斉に襲いかかってきた、

イヴは跳躍して上手くかわすと一番近い男の懐に飛び込む。

だが寸前で横からの一閃に気が付きそれをかわすと、また上から一閃がきた。

男達は上手く連携を使いイヴを翻弄する。

最初の一撃すら入れられないイヴはイライラしてくると、それにともなつて動きもだんだん荒くなってきた。

徐々に追いつめられる。

「どうした、威勢が良いのは最初だけか？」

「クソっ！！」

分が悪いと判断したイヴは身を翻すと走り出した。

こういう場合は逃げるに限る、大通りまで逃げ切れればこいつらも追ってこないだろう。

そう予想をつけたのだが、走れば走るほどダウントウンの奥に追い込まれる感じがした。

地の利は向こうにある。

おそらく相手はこういう戦いに慣れているのだろつ。

不用意に紛れこんだ自分を恨みたくなつた。

「追いつめたぜ」

前方を壁に阻まれ逃げ場を失つたイヴを男達がニヤニヤしながら近づいてきた。

イヴが切りつけた男も復活したらしく、大振りな剣を肩に担いでニヤニヤしていた。

「殺しやすいよ、お前は高く売れそうだから」

「売る前に味見はするかもしれないけどよお」

そついつて下品な笑い声をあげる男達。

だが突然場違いに間の抜けた声が背後から響き、男達の笑い声が止まった。

振り返ると抜き身の剣を手にした男が、さも当たり前のように立っている。

ダウントウンの住人にしては仕立ての良い服を着ており、かと言つてどこぞのお坊ちゃんを着るような高価な服ではない。

普通の一般庶民が着る服に身を包んだ男だ。

だが、その男を場違いにしているのは異様に顔が整つた男だということだ。

「それ俺も混ぜてもらえるか？」

声でそれがさつき大通りであつた男だとイヴはすぐに気が付いた。

「ああん、混ぜてくれだあ？これは俺達の獲物だ。横取りはいけねえよあんちゃん。それともお前も売りたいか？どの世界にも物好きってものはいてよお、あんちゃん顔綺麗だから良い値でお貴族様に売れそうだな、ぐへへへっ」

「褒められて悪い気はしないが、遠慮しておくよ。俺にそういう趣味は無い」

「おめえの趣味は関係ねえよ」

数人の男相手に全く怯んだ様子の見せない青年に、何故かイヴのほうがハラハラしながら見守っているが、同時に男達の注意が完全にイヴから逸れていることにも気が付いた。行動は早いほうが良い。

イヴは手近な男の股間を背後から蹴り上げ悶絶している隙に、壁を蹴り上げるとその男に注意が向いていた男の背を踏む台にしてさらに高く跳躍した。

その瞬間、イヴの視界の下で何かが高速で男の群れに飛び込んだ。

それはあつという間に男達を切り伏せてしまった。

5メートルほど先に着地したイヴはそれを呆然と見るが、当の本人は何でもないかのように剣を鞘に納めていた。

そしてイヴのほうを見るとニツコリと笑った。

笑うと微妙に幼い顔に一瞬ドキツとするが、つとめて顔には出さない。

「礼は言わんぞ」

「構わない、こっちが悪いもんだしな」

「アンタは何者だ？」

その問いにしばし考え込んだ男は、やがて

「うーん、浮浪者？」

そんなことを言った。

「嘘言え、そんな身なりの綺麗な浮浪者がいて堪るか！！どっかの金持ちの放蕩息子の方がまだ真実味がある」

「おお、それだそれ。まさしくそんな感じた」

お前よく分かったなとケラケラ笑う男にイヴは目眩を感じると、気持ち切り替えダウンタウンから抜け出すべく歩き出した。待ってくれと男が背後から追いかけてくるが無視する。

「あのさあ、お前名前何て言うんだよ。おれはヴァルって言うんだ」

勝手に名乗りだした男をうつとおしく思いながら歩き続ける。

関わりたくないという空気を前面に押し出しているつもりなのだが、残念ながらこの男には空気を読むという文化が無いらしい。

顔は整っているのに残念だ。

男の声をBGMにすることに決めイヴは歩き続けるが、さつきから同じところばつか歩いていてる気がしてならない。

というか確実にそうだ。

しばらく歩き続け、座っているじいさんを目の前にイヴは確信した、このじいさんはさつき見たばかりである。

迷った。

認めたくないがそういうことだろう。

イヴがどうしようかと悩んでいると、いつの間にか隣に立っていたヴァルが

「ああやっぱお前迷ったんだろ。だから俺が案内してやつ」

とりあえず男の鳩尾に一発入れたイヴは、さっきとは違う道を選んだ。

第3話

「そんなに怒るなって、可愛い顔が台無しだぞ？」

結局、あの後自力で抜け出すことが出来なかったイヴは仕方なく目の前で美味しそうに肉を頬張る男・ヴァルに助けてもらうことになってしまった。

慣れ親しんだ王都でまさかの迷子とは不甲斐無いが、一番悔しいのはその後の食事にまで付き合わされている事だ。

しかもヴァルの奢りである。

「何が目的だ」

ジューズの入ったグラスを飲み干し、叩きつけるようにテーブルに置くと、イヴは目の前の男を睨んだ。

「特に何も、俺がこうしたいからこうしてるだけ」

「だからって見ず知らずのその日会った奴に飯まで奢る奴がいるか！」

「ここにいんだろ？」

「おちよくってんのか！」

こちらは怒り、凄んでいるというのに、全くそれを気に留めていないかの、人懐っこい笑みを浮かべたヴァルは、再び肉に被りつき始めた。

何とも美味しそうに食べる食べる。

その姿に毒気の抜かれたイヴは結局綺麗に平らげるまで、それを眺めていた。

「それで何だっけ？」

「何だっけじゃない！……もういい、私は帰る」

イヴは懷から自分が飲んだジュース代をテーブルの上に叩きつけると、背後から止める声が聞こえてきたのを無視して店を出た。

日も沈み、王都の隅で夜の繁華街が如何わしく賑わい始めた頃、街の北側に位置する白亜の王宮では、不審者警戒の為に兵士達が寝ずの番をしていた。

そして、その眼を掻い潜るように人影が一つ。

全身を黒いフードで覆ったその人物は、真っ直ぐ迷うことなくメインである王宮の更に奥にある後宮に向かって進んでいた。

沢山の扉が並ぶ中、一番奥にある一番大きな扉の前に進み、その影はノックすることなくその扉を開けると音も無く中に忍び込んだ。

「寝てるところ悪いねえ」

そう口にして被っていた黒いフードを脱ぐと、出てきた顔は昼間イヴにちよっかいを出したヴァルだ。

脱いだフードを近場にあったソファにぞんざいにかけて、そのままドカッと座る。

「たまには連絡の1つでも入れてから来たら如何かしら？飯にもレディの部屋ですよ」

当たり前のように侵入してきた不審者に対して、何でもないように

そう言つて返したのは、暗い部屋の中で質素な寝巻に身を包み寝台に腰かけている少女だ。

少女とは言つても歳は20前半だ、童顔のせいかパツと見では10代にも見える。

そしてその手には鋭利なナイフが握られていた。

この部屋の住人でありこの国の王女でもある第2王位継承権を持つティターミア・ファン・フォンゼルグである。

ティターミアはナイフを枕元に隠したため息をついて立ち上がると、戸棚から二人分のグラスとワインボトルを1つ取り、ヴァルにグラスを一つ渡した。

そしてその中に血よりも赤く毒々しい色をしているワインを注ぐ。

「相変わらずすっげえ色だな」

「フォンゼルグの一级名産品の最高級ワインですわ、庶民の口に入る事なんて滅多に無い代物ですよ」

そういつて、ティターミアは自分のグラスにもみなみとワインを注ぐと、グイツと一気に飲み干した。

「とても一国の王女とは思えない飲みっぷりだな」

「お黙りなさい…良いではないですか別に誰も見てないんですよ。いつも格式ばつてたら肩凝りますわ」

「一国の王女稼業も大変だねえ」

そう言つてヘラツと笑うと、ヴァルも一気に飲み干すとグラスをテーブルに置いた。

そこへ二人の耳にキキツと何かを擦るような音が入ってくる。

それと同時に壁の一部がゆっくりと回転し、中から音が一人出てきた。

「兄様！」

ティターミアは駆け寄ると、男に手を貸し壁から出てくるのを手伝った。

「誰かと思えばお前か、ヴァル。相変わらず元気そうだな」

「お前はちよつと老けたんじゃないか？」

「黙れ」

服に付いた埃を叩き落としティターミアの兄、フォンゼルグ王国の第一王位継承者である・エルディン・ファル・フォンゼルグは、ヴァルの隣にドカツと座った。

王子でありながら剣術は中々の腕前を持ち、王子でなければいずれはこの国の將軍職に就いていたであろうといわれる。

おまけに顔も良いので、貴族の娘が社交界ではこぞって集まってくる。

20も後半になるのに未だに決まった相手がいないのがその原因だが、フォンゼルグ国王の悩みの種にもなっていた。

そんな事を気にも留めない当の本人は、ヴァルからグラスを奪うと、妹と同様になみなみとワインを注ぐと一気に飲み干した。

しばらくするとティターミアが一人掛けの椅子をどこから引つ張り出してきてそこにおさまると、ヴァルがおもむろに口を開いた。

「最近城下周辺が騒がしいじゃないの」

「それを言うただけにわざわざこんな時間に来たんですの！？迷惑にも程がありますわ！」

「ティティー少し黙っている」

身を乗り出して怒鳴ったティターミアだが、エルディンに怒られると抗議の目を向けるが大人しく椅子に座りなおして落ち着いていた。

「夜中なんだ。ここは後宮で国王以外の男の立ち入りが禁止されている上に、俺はともかく部外者まで入れて、しかもそれが男だなんてばれたら、大変なことになるぞ。分かってるのか？」

それを言われてぐうのねも出ないティターミアは、しょんぼりとして俯いた。

「ヴァルもだ。どうして俺の部屋に直接来ないで、毎回毎回妹の部屋に来るんだ。悪いが、お前に妹はやらんぞ」

「頼まれたっていらねえよ。俺がこの部屋に来るのは、エルの部屋の警備が厳重で侵入出来ないからだ」

「何でコソコソ侵入するのを選ぶんだ。友人とかいって堂々と正面から入ってくれば良いだろ？」

「それじゃあお前の外聞が悪くなるじゃないか。どこぞの馬の骨を王宮に入れてるなんて噂立ててみる。何言われるか分かったもんじやないぞ」

ティターミアが小さい声で抗議の声を上げていたが二人は無視した。そしてヴァルに言うことにも一理あると思ったのか、エルはこの件については押し黙った。

しばらく静寂があたりを包んだが、エルが渋い顔をして口を開いた。

「まだ公にはしていないが、最近城下の外で魔物が活性化し商隊がいくつも襲われてる。その事後処理やら対策やらで連日忙しいんだが、生存者がいないせいもあって原因が全く分からない状況だ。全く頭の痛い話だよ」

「……それは大変そうだな。」

「父上も国軍の一部を動員して調査しているが、今のところ手がかりを掴んだって話は聞かないな」

「ギルドに話は聞いたのか？」

「あそこはこの国にも所属しない独立機関だ。おまけに王宮との折り合いが悪い。公にもしていない以上、ギルドに聞くわけにはいかない」

「何で公にしないんだ」

「この時期に公にしてみろ、民の不安を煽るだけだ」

フォンゼルグ王国は大陸の中でも割と国力の強い国ではあるが、最近隣国との折り合いが悪く国境付近が騒がしいのだ。

そのせいか物流も依然よりも若干落ち込み、それが民の間で不安要素になっっている。

戦争で負ける気はしないが、いざ戦争になったときの犠牲を考えれば出来れば避けたい。

そんな時期に魔物の危険まで迫っているなんてことになったら、それこそ国の内部から崩壊しかねない。

「なるほどね。大変なんだなあ、国を治めるつても。まあっそんなお前に朗報だ！何とこの俺様がギルドに接触してきてやったぜ！」

「……………はっ？」

「……………なんですって？」

爽やかな笑顔付きの突然のヴァルの宣言に兄妹二人で綺麗に驚きの声を上げた。

「正確にはそのギルドに所属してるやつにだけだな。いやあ弄りがいのある面白いやつだったぜ」

誇らしげに喋るヴァルに口をあぐりと開けてみていた二人だが、我を取り戻したのか、ここが後宮だということも忘れて叫んだ。

「お前はバカか！王族と付き合いがあることがバレてみる、スパイと疑われてそれこそ本格的に関係が悪化するぞ！」

「そうですね！これで何かあったら全てあなたのせいですわよ！そうなたら絶対に許しませんわ！」

耳元で怒鳴られ、指で塞いだヴァルは不貞腐れながらも言い訳をした。

「まあまあ落ち着いて。ここ後宮だよ？それにあいつ城下で迷子になるくらいには間抜けだったから多分大丈夫だ」

「そういう問題じゃない。実はこの件は王宮でも一部の人間しか知らないんだ、国が民に隠し事をしていることがばれたら………頭の痛い話だ」

頭を抱えて俯くエルディン。

ティターミアはやさしくその背中をなで「お勞しい、兄様」と嘆いた。

その美しい兄妹愛に若干顔をひきつらせたヴァルは

「ああでも、それ多分直に隠せなくなるぞ」

「どういうことだ」

ちよつと立ち直ったらしいエルディンが顔を上げる。

だがヴァルは追い打ちをかけた。

「先日とあるギルドで死人が出た、例の魔物に襲われたらしい」

「……どこのギルドだ」

「『黎明の大地』」

エルディンとティターミアが目を見開いて驚き、そしてお互いの顔

を見た。

「待つてください！『黎明の大地』は魔物退治のエキスパート集団ですわ！魔物退治にかけては我が国軍を凌ぐとも言われていますのよ！何かの間違いですわ」

『黎明の大地』はここ15年程で台頭してきた新参のギルドだが、魔物退治の腕前は一流。

ただでさえ数の少ないSランク級のギルド員を複数人保有していることで有名だ。

「俺だって最初は何かの間違いだと思ったよ。だが事実らしい。SランクじゃなかったがAランクの二人組が襲われた。俺が接触したのは、そのうちの片方、生き残ったほうだ」

「生き残っただと!？」

今まで生存者がいないことでこの件は先が全く見えなかった。

だが生存者がいるとなれば話は違う。

「話を聞こうと思ったんだが、残念ながら仲間を失って傷心中でね。今日は残念ながら顔を覚えてもらうのと、ご機嫌取りで飯を奢ったくらいだ。ついでにあんまり心象はよろしくないみたいなんだよね」

「どうせいつもみたいに余計なことを言ったのでしょ？嫌われて当然ですわ」

「失礼だなあ」

「お前の初回接触には期待してない。それで、また会う予定は？」

「特にない！」

元気よく宣言すると兄妹からため息が出た。

「そうだと思いますわ」

再び部屋に静寂が訪れた。

第4話

ザツクの死から一週間が過ぎた。

ギルドは表向きは以前と変わらぬ姿に戻ってはいるが、時節ナタリーが暗い顔をしているのをイヴは見逃してはいないし、それにギルドマスターの額も少し広くなっているような気がするの、恐らく気のせいではないだろう。

「マスター……………禿げた」

脳天に鉄槌が落ちた。

頬杖をついていたのだが、勢いで手から滑り落ち強かにおでこをテーブルに打ち付ける。

額と頭の両方を抑えながら顔を上げると、二の腕に血管を浮き上がらせ良い笑顔をしたギルドマスターが立っていた。

どうやら考えていたことがそのまま口から出てしまったらしい。

「まったく、いつまでウジウジしてるのかと思えば、そんな事を言う元気があんなら、ユニオンに行って依頼でもこなしてこい！働かねえ奴を養ってやる余裕はねえんだぞ」

「……………分かってるよ……………脳筋のくせに耳だけはっ」

「聞こえてるぞ、イヴ」

腕組みをして器用に片眉を上げているマスターに舌を出すと、イヴは二人のやりとりに笑う仲間の間を縫って酒場を出た。

本当はいつまでもウジウジしてちゃいけないのは分かってる。

マスターも言った通り、イヴの所属する「黎明の大地」は他と比べてまだまだ出来立ての新参ギルドだ。人もお金も信頼もまだまだ足りない。

ギルドの歴史は大きいところだと、百年単位にも及び、当然そういうところは人数も多く、資金も豊富でそして各国からの信頼も大きく、凄いところになると直接王族と取引をしていたりする。

「黎明の大地」はここ15年くらいで出来た新しいギルドであり、人数は20人に達しておらずまだまだ弱小ギルドだ。

唯一誇れるところはSランク保持者が20人未満でありながら3人もいるところだろうか。普通は50人に一人いるかいないかくらいなので、これはかなりの保有率だ。

だからと言って他がダメかと言われたらそうでもない。

イヴはまだ18になったばかりだが既にAランクだし、ザックだってAランクだった。

というか、下からEDCBASZとランクが上がり、Zなんてものはここ何十年出ていないという話なので、実質上から2番目のランクに位置する。

他のメンバーだってCランク以上の人間しかいないので、そこら辺のギルドよりかはよっぽど粒が揃ってる。

何でそんなにメンバーが上質なのかと言われれば、要するにそういう人達だからだ。

どういう形であれ問題があり、他のギルドに入れない。

つまりそういう事だ。

かくいうイヴも物心がついたときには既に両親はおらず、森の中で動物に育てられながら魔物を狩っていた。

マスターに拾われた時も「ギルドを作ったんだが、人がいなくな来ないか？」なんて言われても当然何言ってるのか分からず、ただ貰った果物の甘さが口の中に広がっていて、もっと食べたいからついてきただけだ。

今思えば物凄い状況だ。

筋骨隆々のひげ面の親父が、小汚い野生の小娘を食べ物で釣っていたのだから。

犯罪すれすれである。

幼女誘拐と取られてもおかしくない。

かくして、「黎明の大地」ギルドメンバー第1号にめでたくなったイヴは、以来このギルドを家として生活していた。いわば仲間は家族なのである。

「……………ヴさん。イヴさん？」

気が付くと、ユニオンの受付嬢がイヴの顔を覗き込むようにして伺っていた。

「…あつ、ああすまない」

「大丈夫ですか？ ばあつとされていたようですが、最近暑いですからね」

「大丈夫だ、ちょっと考え事をしていただけだ」

「大丈夫なようでしたら依頼の内容の確認をしますね」

「ああ頼む」

「依頼はBランク。家畜を襲う魔物の討伐。場所は王都南東の町・リドン。依頼主は村長のソドさんです。請負人はAランク『黎明の大地』所属のイヴ・ウルファン。これでよろしいですね？」

「確認した」

「では、契約が成立いたしましたので、証明書を発行いたします。成功報酬はいつも通りギルドに9割振り込んで起きますので、報告後にご確認下さい」

証明書はすぐに発行され、再び内容を確認するとイヴはそれをした。つた。

一応依頼の報告をするために一旦酒場に戻る。

なんとなく格下のBランクを選らんでしまったが、怒られないだろうか？

だがそんな事は杞憂に終わり、マスターは証明書を一瞥しただけで

イヴに付き返してきたし、これから仕事だというのに仲間は酒を突きつけてきた。

それを丁重に断って自室から愛刀のナイフを2本腰にバツテンになるように装着すると、ナタリーに一言行ってきますと言って酒場を出た。

リドンまでは徒歩で半日の距離だ、そこまで遠くは無い。

だが、ついたときにはとつぷりと日が暮れてしまった。

少々のんびりし過ぎたか。

急いで村長宅を探し尋ねると、ギリギリ壮年に入ると思われる女性が出てきた。

「ユニオンの紹介で来たものだが」

そう言う女性はいヴを値踏みするようにジロジロと上から下まで見てきた。

それもそうだ。どっから見てもイヴはまだ成人しているようには見えないし、おまけに同年代から見ても幼く見える上に小さい。怪しまないほうが可笑しい。

さんざんこんな目で見られ慣れたものだが、イヴはいつも通りユニオンが発行している身分証明を女性に差し出すと、やっと信じてもらえたのか家の中に入れてもらえた。

「来るのが遅くなつてすいません」

居間に通され、そこでしばらく待っているとおじさんが出てきた。

さっきの女性よりちよつと年齢が上だろう。

どうやらこの人が村長のソドさんらしい。

「構わんよ。どっちみち襲ってくるのは朝方だ。日の出の直前に奴らは襲いに来る」

「何か特徴とか分かりませんか？」

「さあなあ、日の出前でよく分かったのだが、とにかく巨大だ。そして黒い。あと目が赤く光っている。そのくらいかなあ」

「いつ頃から襲われ始めたんですか？原因とか思い当たることはありますか？」

「つい最近だよ。ほんの半年前はこんなことはなかったのに。原因は全く見当がつかない。森で何かをやらかしたという話も聞いてないしなあ」

ソドはなんとか思い出そうとしているみたいだが、しばらく待ってみても思い出せないことから、思い出せないのではなく、本当に分からないのだろう。

「分かりました、ありがとうございます」

「ところで、女の子一人で王都から歩いてきて疲れただろう。丸一日はかかるからね日の出前まで時間がある。我が家で休んでいかないかね？」

「気持ちはいがたいですが、ちょっと村の中を歩いてきます。あらかじめ地理を把握しておきたいので」

そう言って立ち上がると、ソドはまだ何か言いたげだったが黙ってイヴを見送ってくれた。

村の中を見て回るが、2階建ては村長の家だけのようで、他は全て平屋だ。

それに土地柄なのかそれとも手入れが良いのか、平坦な草地で非常に走り易い。

襲われる家畜の牧場は村の東にあり、多くの動物達が警戒しているせいか、一か所に固まっていた。

暗くて良く見えないが、牧場のいたるところに恐らく例の魔物が付けたのであろう爪痕や、抉られた地面があった。

「まだ新しい。ここ最近作られたものだ。しかし酷いな、こちら辺でこんな凶暴なものが生息しているなんて話は聞いていないが、まさかな……」

しばらく散策してみたものの、他には何も見つからなかった。仕方なく、まだ起きていた一番歳を取っているヤギに話しかけた。

「襲われた時のことを教えてくれないか？」

ヤギは一瞬イヴを見つめ、それから群れを一瞬振り返ってみると、少し離れたところに歩き始めた。

【魔物、見たこと無い、聞いたことない】

立ち止まって振り返らずにヤギは喋り始めた。

「見たことも聞いたことも無いのか？」

【人間見たこと無い、言ってる】

「それは聞いた。お前らも見えてないし、聞いてたこともないのか？」

【無い】

「どんなやつだった？」

【黒い、大きい。目、赤い。形、バラバラ。ひっかく、仲間飛んだ】
「!？」

イヴは目を見開いた。

形がバラバラの魔物、つまり同一種の集団ではない。

ザックを襲った魔物たちも同一種の集まりではなかった。

つまり、ザックを襲った魔物達の仲間である可能性が高い。

イヴは無意識に腰のナイフに手がいった。

【僕たち怖い。襲われる、仲間、いっぱい死んだ】
「大丈夫だ。守ってやる」

そういうと、ヤギはある一点を見つめ始めた。
イヴも追うようにしてそちらのほうに視線を向ける。
そこには深い森への入り口が広がっていた。

第5話

イヴは森に対して動物達が背になるようにして立っていた。時刻はあと一刻ほどで日の出になる。

背後で動物達がたじろぐのが気配で分かった。

絶対に守る

そう心に誓うと、両手を腰のナイフにあてた。

風が変わる。本当に微かだが、空気が張り詰めるのが肌で分かった。同時に背後の動物達が一斉に下がり始める。

そして森が揺れ、隙間からいくつもの赤い光が浮かび上がってきた。イヴはナイフを抜くと一気に駆け出した。

同時に正体不明の魔物達もイヴに襲いかかろうと駆け出してくる。

数は6。

素早く判断すると、一番前を走る一番小さい魔物に向かって走りこんだ。

小さいとは言っても巨体の中で一番小さいだけであって、イヴと比べれば2倍以上はある。

襲いかかる振りをして脇をすり抜けると、目の前の振り返らずに背後にナイフを一本投げた。

正確に頭部にナイフが突き刺さった魔物は、血飛沫を上げながら前に倒れる。

それを確認もせず右手にナイフを構えると、腕を大きく振り上げてきた魔物の攻撃を間髪で飛んで避けると、腕の着地。そのまま、腕伝いに駆け上がって首を切った。

これで残り4体。

頭部の無い胴体の上に乗る、残りの魔物を見据える。

警戒しているのか襲ってこない。

しばらく膠着状態が続いていたが、ふとイヴから一番離れた位置にいた魔物が民家のほうに目を向けた。

そして口元をニヤリとさせる（少なくともこの時のイヴにはそう見えた）と、イヴには目もくれず民家に向かって走り始めた。イヴは焦って魔物を追いかけようとするが、残りの3体に阻まれしまう。

まずい、助けられない

何とか隙を見て抜け出そうとするが、絶え間のない連撃に避けるので精一杯になってしまった。

視界の隅で魔物が民家に向かって腕を振り上げるのが見えた。

振り下ろされる腕がスローモーションがかかったかのように見える。体が熱くなるのを感じた。

身の内から吹き出すような力を感じ、意識が遠のきそうになる。

そして腕が民家に当たると思われたその瞬間、魔物の腕が宙を舞った。

綺麗に弧を描いて吹き飛んだ腕は、丁度魔物とイヴの間に落ちる。

何が起きたのか分からなかった。

それは魔物達も同じで動きが停止している。

鋭い音が響いた。

同時に魔物の体が二つに割れ、左右にそれぞれ崩れ落ちた。

その間から現れたのは大剣を肩に担いだ人影だ。

ゆっくりと動き出した人影が民家の陰から出てくる。

「お前は！？」

ヴァルだった。

口元に余裕の笑みを浮かべて悠然と立っているその姿は間違いない。この間迷っていたところで絡まれ、その後ご飯を一方的に奢ってくれた男だ。

「よおイヴちゃん！久しぶりい」

呑気に手なんかを振っている男に毒気を抜かれ一瞬気が抜けそうになったが、その隙を見逃さなかった魔物の気配に気付き、間一髪のところまで攻撃を避けられた。

「今忙しいんだ！」

「見れば分かるよ」

次々と襲いかかってくる魔物の攻撃を避けつつ何とか隙をついて攻撃をしようとするが、中々その隙が生まれない。

攻撃の中で何とか移動して、死んだ魔物の頭部に刺さったままのナイフを回収し、双刀に持ち直すと振り下ろされた腕に突き刺し、そのまま横殴りに襲いかかってくる他の魔物の腕をナイフを軸にして避け様にもう一本を突き刺し、反動を利用して腕に飛び乗ると、魔物の顔を蹴り上げた。

飛んできた腕をジャンプで避け、そのまま蹴り上げた顔にナイフを突き刺す。2本目も首に刺し確実に息の根を止めた。
残り2体。

だが、ずうんという音が背後で響き、地面が揺れる。
振り返ると、倒れた2体の後ろでまた大剣を抱えたヴァルが笑顔で立っていた。

「私の獲物だ！」

「知ってるよ」

当たり前のように返されイヴは苛立つ。

「俺はずっとまた君に会う機会を探してたんだ、そしたら丁度王都を発つ君が見えたからついてきたんだけど、いやあ君足早いね。おかげで追いついたのはこんな時間だ。着いたら着いたで君は魔物と戦ってるし、焦ったよ」

ヘラッとしながら大剣を治めるヴァルをイヴは睨む。

「何故私を追いかけた」

「だってイヴ可愛いじゃん」

言い終わるか終わらないかというところで、ヴァルの耳元でヒュンと音が鳴ると同時にハラッと髪が数本切れ、ドスッという音が背後から響く。

ヴァルが冷や汗を掻いて振り返ると、ナイフが深々と地面に突き刺さっていた。

さらにカチツと音がして再び顔を前に戻すと、イヴが首元にナイフを当てて間近で睨んでいる。

「ごめん。冗談だって！可愛いとは思ってるけど、ちゃんと真面目な用事で来てるから！怪しくないから！」

必死になって、だがどこか冗談っぽい仕草で首を横に振る姿にどうでも良くなったイヴは、構えていたナイフを腰に戻すと踵を返した。遠くで怯えていた動物達の元に寄ると、イヴの身を心配して向こうから駆け寄ってきた。

鼻をスンと鳴らして体中の匂いをかがれるのはちょっとくすぐったい。

【良かった、死んでない、良かった】

口々にイヴの無事を祝福する動物達。

直後、彼らの陰が伸び東の方角が明るくなった。

日の出だ。

イヴはそちらに目を向けると、いつの間にか隣に立っていたヴァル

がイヴの腰に手を回そうとして、ヤギに体当たりされていた。それを横目に無表情で眺めていると、背後からシューウウという音が響いた。

イヴとヴァル、そして動物達が一斉にそちらに視線を向けると、先ほど倒した魔物が黒い煙をあげながら消えようとしていた。

「不味い！」

ヴァルが初めて見せる真剣な顔で魔物に駆け寄るが間に合わず、到達したときには初めからそこに何も無かったかのように、綺麗さっぱりと魔物が霧散してしまった。

ヴァルの表情に一瞬ドキツとしたイヴも、そんな自分の感情に動揺しつつ魔物に駆け寄るが当然間に合わない。

「くそっ！折角の手掛かりだったのに、逃したか……」

「手掛かり？」

「そうだ。言ったら、ちゃんと真面目な用事があるって。だがここで話すのはあれだ、場所を移そう。それと村長に報告もしなくちゃいけないだろ？」

「うん。だけど、倒した証拠の魔物が消えちゃった」

「証拠ならあるじゃないか。もう彼らは怯えてない」

そう言つて動物達を指差すヴァルにイヴは口元に薄い笑を作った。

第5話（後書き）

イヴって結構感情が希薄な奴です

第6話

結局、動物達の反応だけでは納得してもらえないイヴはもう一日村に滞在することになった。

もう一日泊まって、本当に何もしなければ認めるとのことだ。

そんな訳で真昼間だというのに村の酒場でヴァルに自棄食いに付き合わせていた。

「そんなに食べたら太るぞお、体にも悪い。」

「煩い！」

次から次へと皿を空にしていくその姿に、ヴァルは飽きた笑みを浮かべたが、面白がっているのは確実だ。

それにただ自棄食いに付き合わせている訳でもない。

理由も無くこんな不愉快な男と食事を共にしたりしなし。

「それで、真面目な話ってのは？」

骨付き肉を手掴みで男らしく食べるのは、単に幼い頃からのマスタ―の影響だ。

ナタリーに怒られてからは、ナタリーの前でだけはこんな食べ方はしないが、今はそんな目も無いので気にせずバクバク食べている。

「人が多いからあんまり声を大にして言えないんだが、最近王都では正体不明の魔物が出没し商隊を襲っている。」

イヴは正体不明の魔物という言葉にピクリと反応した。
持っていた骨付き肉を皿に戻し、居住まいを正す。

「その魔物に襲われて今まで生存者はいなかった。だが、ついに生存者が出たんだ」

「……それが私か」

無言でヴァルが頷いた。

「この間迷子になってるお前を助けたのは偶然じゃない。探してたんだ、その生存者を。でもギルドは滅多に外部に情報を漏らさない。だから苦労したよ」

「……それは可笑しい。『黎明の大地』は魔物討伐を専門としたギルド。逆に魔物に襲われたなんて信頼が落ちるような事を外部に言う訳がないだろ。何でそんな事をお前が知ってるんだ」

「俺はこの件を初期の初期からずっと探ってる。だから情報網だつてかなり張り巡らしてるんだ。魔物討伐主体のギルドは当然ずっと前から動向を見張ってる」

言ってる意味は分かるが、だが心のどこかで何かが納得出来なかった。

「何でお前はここまでこの件に拘るんだ。魔物討伐ならギルドに依頼すればいいじゃないか」

「拘る理由は言えない。だが、ギルドに依頼出来ない理由なら言える。俺の背後にいるのは王宮、それも王族だ」

”王族”という単語を聞いた瞬間、イヴはあからさまヴァルを警戒した。

椅子に座っているが、無意識にその手はナイフに伸びているし、腰は半分くらい浮いていた。

「背後に王族がいることをそんなに簡単に言っただけなのか？」

「許可は貰ってる、君限定で」

「私が他の人間に言わないとも限らないぞ。王宮とギルドの仲は良くないからな」

だがヴァルはそんなイヴを一瞥しただけで、中途半端に残った骨付き肉を掴むとかぶりついた。

「いま内側から国が荒れれば確実に滅びる」

「……………」

いくら学の無いイヴにも言っている事は分かった。

最近風の噂で国境付近が荒れていることを聞いている。

いま内部から不穏な空気を見せれば、それを切っ掛けに周辺諸国が攻めて来るとも限らない。

そうなれば多くの力無い者たちの命が奪われることになる。

確かにギルドは中立として国家間の争いには関わらないが、だからってそれも不本意だ。

つまりヴァルが言いたいのは誰かに言って、それで問題が大きくなって国が荒れれば共倒れになるぞという訳だ。

「……………私が会ったのは、今日見た奴らと対して変わらない。奴らは黒くて大きくて、種族がバラバラだ。なのに、近くに魔族の気配が無かった。目的も分からない、捕食が目的にしては死体の残り方がおかしい」

そこまで言ってイヴは口をつぐんだ。

今思い出しても凄惨な光景だった。

イヴを逃がすために自分を囷にしたザック、そして発見された時の見るも無残な姿。

普段戦いなれているイヴでさえあれにはかなり動揺した、妻である

ナタリーの心境とは一体どんなものだったのだろうか。
それを思うと急に無性にギルドに帰りたくなった。

「嫌なこと聞いて悪かったな」

「気にするな。事実是不変ならない」

「そうか……」

それっきり口を開かず妙にしんみりとした空気の中、二人は無言で食事を再開した。

その後も妙に気まずい雰囲気の中、新たな魔物も現れず翌日には無事村長にも納得してもらえた。

今は無事に終えたことを示すサインをもらった証明書を懐におさめ、ホクホク顔でイヴはヴァルを後ろに従えるような形で歩いていた。

「これからどうするんだ？」

「どうするって」

立ち止まって振り返ると、あの時と同じように真剣な顔をしたヴァルが真っ直ぐにこっちを見据えていた。

なんだか心の中を見透かされそうで居心地が悪い。

「俺はこのまま魔物の正体を突き止める。魔族が関わっていないなら、他にももつと手を広げないといけない。悪いがギルドは引き続き監視させてもらう」

「だからなんだ」

「手を組まないか？と聞いている。お互い手を組んだほうがやりやすいだろ？」

「私の一存では判断出来ない」

イヴは一介のギルド員に過ぎない。

だからそんな重要なことをイヴ一人だけでは決められない。
仮に手を組むとなっても少なくともマスターには話を通さなくては
ならない。

マスターにヴアルを合わせるのは色々な意味で気が引けるが、それ
さえ終わればその後のユニオンへの連絡とか細々としたことはマス
ターがなんとかしてくれるだろう。

「手を組みたいなら、お前がマスターと話をつけるんっ」

そこまでだった。

突然轟音が響いた。

イヴもヴアルも驚いて音が響いた方向、王都のほうに目を向けた。
そして

「危ない！」

目に飛び込んできたのは轟音と共に木々ををなぎ倒す突風と、そし
てそのすぐ直後に視界を何かに覆われ、そのまま地面に倒された。
凄まじい衝撃が襲ってきたのを地面からの衝撃で感じた。

衝撃は数秒で治まり目を開けると、ヴアルが自分に覆いかぶさるよ
うにしてこちらを見下ろしていた。

「大丈夫か？」

気遣わしげな声音で訪ねてくる。

だが普段同年代（と思われる）異性とこんなに密着することが無い
イブは動揺し、思いつきヴアルを投げ飛ばした。見事な弧を描い
て投げ飛ばされるが、空中で体を捻ると綺麗に着地する。

「なっ……なっあっ、おまっ……ばっ……っっ！」

呂律が回らず支離滅裂な言葉が口から出てくる。

そんな様子をニヤニヤしながら立ち上がったヴァルは、服を2 / 3
度叩いて埃を落とすと、イヴに手を差し出してきた。

「そんなに元気なら大丈夫だな」

ムツとしたが大人しくヴァルの手を取り立ち上がる。

「嫌な予感がする」

かつて無いほどの胸騒ぎ、それを抑えるにはあまりにも先ほどの衝撃は大き過ぎた。

「急ごう」

イヴの手を取ってヴァルが走り出す。

だが、元々イヴのほうが足が速いため、ものの数分でヴァルが息切れを起こし、イヴが手を引くという体たらくだった。

第7話

「何だ…これは」

二人は王都を見下ろせる小高い丘の上にいた。

そして眼下に広がった光景は息を飲むものだった。

魔法障壁を王都全体に全開で展開させ魔物からの攻撃を防ごうとしているが、障壁は所々で穴が開き意味を成していない。

障壁内部では飛行型の魔物が飛び交い、陸上型の魔物が闊歩し破壊行動を行っていた。

ギリギリ王宮を守る障壁はまだ保たれているが、王都の街並みからはいたるところから煙が上がり、魔法を使っていると思われる方陣や爆発がいたるところで発生している。

どうみても王都側が劣勢に立たされていた。

「くそっ、どうなってる！」

初めて聞いたヴァルの焦る声に現実引き戻されたイヴは、一気に丘を駆け下りた。

ギルドの仲間が心配でならなかった。

彼らの腕を疑っているわけではないが、きっと一般の人たちを守ろうと躍起になっているに違いない。

一般人などただの足手まといだ、護りながらの戦いほど戦いづらいものは無いとイヴは知っている。

未だ王都に侵入出来ていない魔物の群れの中に飛び込み、背後から切って進むと巨大門の前に着いた。

多くの兵士達やギルド所属と思われる者たちが、魔物の多くと交戦していた。

だが負傷者も多く、いつまでもつか分からない状況だ。

また体が熱くなるのを感じた。

このまま全滅すれば、イヴの帰る家が、家族が無くなってしまう。
そんなのは嫌だ！

それから速かった。

身の内から噴き出る力を抑えきれない。

イヴは目についた魔物を全てなぎ倒していく、目に見えて魔物達の数が減っていった。

それに気が付いた兵士とギルドの者もそれに後押しされるかのように、戦意を取り戻していく。

ものの10分程で魔物の数は当初の半分程に減っていた。

「イヴ！」

戦っていると突然腕を掴まれ攻撃を阻まれた、その隙に魔物が襲いかかってくるが巨大な大剣がそれを薙ぎ払う。

「止めるな！」

掴んでいる腕を振り払いイヴは怒鳴った。

「止めるつもりはない！ただどお前は先に確認しなきゃいけないことがあるんじゃないのか？後は彼らに任せるんだ！」

「……………」

忘れていたといえば嘘になるが、魔物を目に入れた瞬間すっかり優先事項が切り替わってしまった。

歯をギリギリと鳴らすと、イヴは踵を返し王都内に駆け込んだ。

すっかり王都は変わり果てていた。

全壊している建物は少ないものの、多くの家が半壊している。

おまけに人の気配がほとんどない。

だが王都の中心に近づくほど戦いは酷くなり、壊れた家が増えるものの、戦っている人間も増えてきた。

イヴは物陰から襲ってくる魔物を無言で見向きもせず切り殺しながら、ギルドの酒場に向かった。

5分ほどで見えてきた建物は、2階部分が半壊していた。

イヴの部屋など見る影も無い。

「みんな！」

中に入るとテーブルはひっくり返し、酒瓶は床に落ち濡らしていた。壁に設置された各々の武器を置く棚に目をやると、蛻の殻だ。

つまり少なくとも仲間たちはギルドにいた時点ではまだ生きていて、今もどこかで戦っている可能性が高い。

外に駆け出すと近場の屋根に登り、そこで魔法を唱えていた男に話しかけた。

「私は『黎明の大地』のイヴ！仲間の行方を知りたい！」

「知るか！こっちは今忙しうわああ！」

突然の叫びに視線の方向を見ると、大きく口を開け涎を振りまきながら真っ直ぐこちらに降下してくる魔物が姿が入った。

小さいが間違いなくドラゴンだ。

世界的に数は多くないが種類が知能が高く狂暴な魔物で、小型のものであれば飼い慣らす馬鹿もいるが、基本的には無理。

度々ギルドで討伐の依頼がくるが、大抵Aランク以上になっている。さらにドラゴン討伐には『ドラゴンスレイヤー』という、ギルド発行の特別許可証が無ければいけない。

そのくらい危険な魔物なのだ。

こいつは前足が無いのでワイヴァンの一種だろう、体の大きさを言ってまだ子供だ。

イヴはナイフを構え、近くの煙突に飛び乗ると大きく跳躍した。縦に持ったナイフを口の中に押し込み、反動を使って首の上に乗る。そしてそのまま2本目のナイフを突き立てようとしたが、ドラゴンが暴れだした。

火を噴く種類では無いが魔法を使う。

イヴは必死にしがみ付き、翼の根本を探り当てると、ナイフで切りつけた。

翼を切られた子ドラゴンはバランスを崩し屋根の上に落下する。

そしてギャツギャツと鳴きながらズルズルと滑り落ち、そのまま地面に叩きつけられた。

すぐ横に着地したイヴは弱ったドラゴンの首を切ると、一瞬目も見開いた後静かに閉じられた。

「まだ子供だ」

後ろに立つ気配に向かって呟く。

「まだ生後何か月つてところだろう。それなのに、何で親も無くんなどころまで、明らかにおかしい」

「何かに操られている、魔族の姿がさつきから全く見えない」

「一体何が起きてるんだよ」

しばらく呆然と立ち尽くしていたが、頭上から声が響いた。

「おーい、お前大丈夫か？」

先ほど魔法を唱えていた男だ、音がしなくなっただけで心配したのか、屋根の上から覗き込んでいる。

「こちらは大丈夫だ！」

イヴの代わりにヴァルが答えると、先ほどの男がすぐ横に飛び降りてきた。

「すげえな、噂には聞いてたが『黎明の大地』ってこんな可愛い娘までドラゴンスレイヤーかよ。あつ、俺はバルマーってんだ、ユニオン公認で情報屋をやってる、よろしく」

先ほどはやたら険しい表情だったが、笑顔は人懐っこい。
歳は20を過ぎたぐらいだろうが、まだちよつと幼い印象が残る。

「さつきは悪いな、まさかこんな子が『黎明の大地のイヴ』なんてなるもんだから疑っちゃったんだ。」

「…………私って変な噂立っているのか？」

「はっはっは、ある意味変な噂かもな。なんせ最年少でAランク保持者だからな。んで、そっちの黒髪のおんちゃん？俺のフォンゼルグイケメンリストには載ってないな」

「ヴァルだ。俺はこの国出身じゃないからな、リストに載ってないんだろ」

「おおう、どこの出身だ？黒髪だから北のほうか？あそこは魔族との混血の子孫が多いからな」

イケメンと言われたときはちよつと得意げな顔をしたヴァルだが、出身のことを聞かれると、途端に暗い顔になった。

それを見たバルマーは手を挙げると、答えなくていいと言った。

「俺は情報屋だが、個人情報回答えたくなければ聞かないようにしてるんだ。いやつでも、興味は津々だけどな！」

頭上では未だにドッカンバツコンやっているが、その中でがははは

はと笑うバルマーはある意味清々しかった。
一頻り笑いこちらが呆れ始めたころ、バルマーが思い出したかのよう
に真面目な顔になった。

「ああそういえば、イヴちゃんは仲間を探してるんだっけ？」

「そうだ、知ってたら教えてほしい」

「なら王城に行くといい。あそこの外が今一番やばいからな」

「一体ここで何が起きてるんだ？」

「さあな、それは誰も分からないじゃないか？ともかく魔物が攻めてくると分かった段階で、すぐ王族共は王都に障壁を張ったんだ。そしてさらに戦えない奴らを王宮内に避難するように命令を出してな。完了後すぐにまた障壁が展開された。いやあ、素早い良い判断だよ。今まで王族なんて俺ら一般人の事なんか考えてないと思ってたけど、今回の事で考えを改めたね」

走りながらそう述べるバルマーを横目で見つっ、よく息が切れないなと感心した。

イヴとヴァルが左右に並んで走るのを、二人の真ん中から2歩ほど引いたところを遅れることなくついてきて、なおかつずっと喋りっ放しのバルマー。

さっきから全く戦っていないが、というかその気がないのかその分ずっと喋っている。

開戦前の王宮の対応、その後の兵士達の働きから、魔物達についての自分なりの考察を延々と喋る喋る。

「俺が思うに、今回の襲撃は魔族は関与してないんじゃないかと思ってる。こんな状況で魔族の姿が一回も目撃されてないのがいい証拠だ。それにさっきのチビドラゴン。あんな戦力になるかもわからないようなもの魔族が戦場に送り込むとは思わないし、第一親ドラゴンが許すはずがない。だけどそうすると、一体誰がこの魔物達を

率いてるのが分からないな」

「魔王が率いてるって考えは？」

「うーんどうだろうな。魔王に関する情報が少なすぎるから何とも言えない。確かに魔王ならそこら辺の魔族とは違って規格外の力を……」

イヴは深くため息をついた。

今はバルマーの話よりも早く仲間を見つけることのほうが先だ。

王宮までの道のりはそんなに長くはないが、如何せん近づけば近づくほど魔物達の襲撃が激しくなってくる。

急げば急ぐほど焦りは募っていった。

その時だ。

背後から自分を呼ぶ叫び声、そしてすぐ耳元で風がうねった。

次いできた衝撃にイヴは吹き飛ばされ、土煙を上げながら瓦礫と化した建物の壁に叩きつ付けた。

鈍く広がる鉄の味に口の中を切ったことを知らされる。

低く唸る声に目を開けると、耳まで裂けた口を開けた魔物が今にも飛び掛からん勢いでこちらを見下ろしていた。

慌ててナイフを構えるが、その手にはナイフが無かった。

視線を慌ててずらすと遙か遠くに落ちている、吹き飛ばされた時に手を放してしまったらしい。

「ギャオオオオオオ！」

「っ！？」

魔物が雄叫びを上げ、巨大な鋭い爪を振り下ろしてきた。

間一髪のところでは避けるが、体勢が悪く無様に転げる。

だが素早く立て直して立ち上がるうと地に足を着いた時だった。

目の前に魔物の爪が突き立てられた。

まるで牢獄のように黒く長い鉄格子のように目の前に現れた爪に驚

いて振り返ると、赤かった。

それが魔物の口の中だと気付くのに、何分の1秒だろうか。死を覚悟した。

またどこかで自分の名前を呼んでいる声が聞こえる。

赤が迫ってくるのがスローモーションに見えた。

静かに目を閉じる。

第8話

だが予想していた痛みは中々来なかった。
死ぬときは痛みすら感じないのだろうか、いやっそのほうが良い。
痛いのは嫌だ。

だがその望みは頭上に落ちた痛みと怒声にかき消されてしまった。

「いつまで目え瞑ってんだ、お前は！」

そう言っただけ胸倉を掴まれ無理矢理立たされたイヴの視界に飛び込んできたのを、ハルバートで魔物の脳天を両断したギルドマスターだ。ハルバートとは言っても通常の1・5倍の大きさはある代物だが。

「命の取り合いの場で目なんて瞑ってんじゃねえ！」

そっいつて無理矢理立たされたイヴは呆然としていると頭の上に重く暖かいものが乗った。

マスターの手だ。

「生きてたのか……」

「死んでほしかったか？」

「……そんな訳ない」

頭の上の手をどかすと飛ばされたナイフを拾い上げた。

刃こぼれはせず鈍く光っている、まるでまだ戦えるとイヴに囁いているようだ。

それを見て、ふっとイヴは笑みを零した。

「みんなは？」

「うちのギルドで死んでる奴なんていねえよ、ナタリーは城内で魔法障壁要員にされてるし、他のやつらも障壁の死守のために近辺でつて……噂をすれば……だ」

マスターが振り返って空を仰ぎると、崩れた屋根を飛び越えるようにしていくつかの影が落ちてきた。

イヴ達の前に綺麗に着地したそれらの影は立ち上がると、みんなイヴの見知ったギルドの仲間だ。

「おお、イヴちゃん無事だったか！」

「心配したのよ。大丈夫怪我はない？つてやだ、口元切ってるじゃない」

仲間4人に揉みくちやにされながら、その中の一人ラミアにひっぱり出されると治癒魔法をかけられた。

口の中に続いていた鉄の味が徐々に引いていく。

ラミアはギルドで唯一治癒魔法のエキスパートとして貴重な人材だ。腕っぷしに自信がある荒くれ者どもは、反対に治癒といった細かいことがからつきしダメである。

あのナタリーでさえ治癒となると逃げだしてしまう。

第一、治癒魔法は高度な知識や技術が必要で、専門のところで学んだとして完全に取得することは難しい。

取得できれば将来は約束されたも同然とまで言われている。

そんなものをラミアがどこで学んできたのかは謎だが、本人も語らないし信頼できる仲間という事さえ分かっていれば他の事なんて塵にも等しい。

綺麗に治ったところでラミアは再びイヴを抱きしめた。

「外に出てたのは知ってたから大丈夫だとは思ってたけど、一回爆発あったでしょ？かなり巨大だったから逆に外のほうが危ないんじゃない」

やないかって心配してたのよ」

「そうだ…爆発！あれて………」

と言っではっと気付く、あれだけの規模の爆風を感じたのに、王都はそれほど損壊していない。どういふ事なのだろうか。

「障壁がなかなか壊れないことに業を煮やしたのかもしれないわね。障壁のすぐ上で奴ら、巨大な魔法陣を出して”何か”を召喚したのよ。そいつがブレスを吐いたて障壁に接触した瞬間爆発してね」

「流石の障壁もあれには耐えきれなくてごらんの通りの有り様だ」
「その後何とか王宮の障壁は耐え切ったから、急遽王城に腕の立つ魔導師達が呼び出されてな、避難所の障壁の強化にあたってるってわけだ」

みんな腕を組んでうんうんとあれは凄かったと頷き合っている。

こんな状況でもそんな事が出来るのはある意味凄いかもしれない。

だがイヴはそんな仲間が誇らしかったし嬉しくもあった。

とここで、イヴが仲間との再会を喜んでいると、背後から声がかかった。

「あのさ、そろそろ良いか？」

びっくりして振り返ると、明らかに不機嫌そうなヴァルと苦笑いしながら困惑しているバルマーが立っていた。

そつえば、仲間との再会が嬉しくてすっかりこの二人の存在を忘れていた。

隣でラミアが小さく「あらっ良い男」って呟いたのが聞こえたが、聞かなかったことにしよう。

確かにあまり美醜のこだわりがないというか、判断がつかないイヴ

にもヴァルの顔はかなり整っていると思うし、バルマーもそんな事を言っていたような気がする。

まあでも助けてもらったのは確かだし気楽に一步踏み出そうとするが、目の前に現れた巨体にそれを遮られた。

「情報屋のバルマーに、お前は誰だ」

しっかりとハルバートを握っているマスターに、それに倣ったように他の4人も前に出た。

先ほど「良い男」と呟いたラミアもしっかりと並んでいる。

仕事と私事は別よ！

と熱く語ってくれたのはいつだったか。

「ああ、俺？まあそうだよなあ、俺怪しいもんな。うん、そうだな。名はヴァル。王族お抱えの情報屋とでも言っておく！」

ヘラヘラツとヴァルはあくまでフレンドリーに話していたが、こちららはそうもいかなかった。

それを聞いて『黎明の大地』の仲間の気配が一気に警戒に変わる。

バルマーはええっとあからさまに驚いて口を開けているし、マスターは明らかに交戦の構えをとっている。

イヴは踏み出してしまった足を戻すタイミングを計りかねていた。

ヴァルを庇うか、それともこのまま状況を見守るか迷う。

まさかヴァルがこんなに簡単に正体を明かすとは思ってなかったし、情報屋というにはあまりに腕が立ち過ぎる事も気になった。

「その王城の情報屋さんが何のようだ」

「そう気張んなくて、別に俺はお前らと戦う気はないよ。大体こんな状況でいがみ合ってたって良いこと無いだろ？」

確かにその通りではある。

あくまで今は非常時で、いくら普段王宮とギルド間の中が悪くともそんな事を言っている場合ではない。

そいつって両手を挙げて無抵抗の意を示したヴァルにマスターは目だけで4人に合図すると、4人も警戒を解いた。

だが依然としてマスターはハルバートを構えたままだ。

「最近王都周辺で正体不明の魔物が出没してる。そいつらにいくつも正体が襲われて全滅もしてる。俺はその件についてずっと調べてたんだ」

「その過程で俺らの仲間が殺された事を知って接触してきたところか」

「話が早くて助かるよ」

マスターは武器は納めずとも警戒を解いた。

「今まで生存者がいなかったけど、今回生存者が出たことが分かった。それで接触しようと思ったんだ」

「それで俺の可愛いイヴに接触したのか」

「まあそうだね。別に取って食おうなんて思ってたない！」

「俺は紳士だ！」とか言っているが、どこら辺が紳士なのだろうか。ストーカーという名の紳士だろうか。

対するマスターも「当たり前だ！最近俺でさえ気安く抱き付かせて貰えないからな！」とか言って指をバキバキ鳴らしている。

最近歳のせいかわかぬ臭がきつくなってきたので、出来れば近付いて欲しくないのであるが、拳骨が怖くて未だに口に出せないのは内緒だ。

背景にゴゴゴゴゴツと音が聞こえんばかりにお互い威嚇し合う二人に、イヴもラミア達もバルマーも毒気を抜かれ、心の中でため息

をついた。

未だに睨み合いを続ける二人から早々に興味を無くしたイヴは思い立ったかのように踵を返して歩き始めた。それに気付いたラミア達とバルマーが追い駆けてくる。

「ちよつとイヴ。急にどうしたの？」

ラミアに話しかけられピタツと歩みを止めると、首だけ捻った。

「もつと優先するべき事があると思ったから」

「………… ああうんそうだね。至極真つ当な意見だと思うよ、すつかり忘れてたわ。どつかのおっさんのせいで」

「上空は未だに魔物だらけだ、開戦当初よりかは大分数が減ったとはいえ、完全に終わったわけじゃない。そんな状況さえ忘れさせるおやつさんがある意味凄いよ」

やれやれと肩を竦めたのは長身でメガネの男、『黎明の大地』所属A級ランクの魔法剣士シューゼル。

まだギリギリ30に届かない彼は、あるときマスターが拾ったとかで酒場に連れてきてそれ以来居ついている。

「それで、どこにいくつもりなんだ？逃げる訳じゃないだろ？」

「当たり前だ、魔物なんて根絶やしにしてやる。けど、その前にナタリーに会いに行こうかと思ってる。心配してるだろうから」

みんながこれだけ心配してくれたんだろうから、きっとナタリーにだって心配かけてる気がする。

ザックの時以来自身だって大変なのに何かとイヴに気を使ってくれている、だからこれ以上余計な心配をかけたくなかった。

それに、早く皆の顔を見たい。

「分かった。私たちは先に行ってるよ」
「うん、後で追いつくから」

それだけ言っと、イヴは走り出した。

第8話（後書き）

変態という名の紳士だよ！

面白いすよね、ギャグ漫画日和

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7582p/>

イヴリアル

2011年10月6日14時15分発行